
「なんか知らんが勇者に選ばれた」

けちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「なんか知らんが勇者に選ばれた」

【Nコード】

N7715Y

【作者名】

けちゃ

【あらすじ】

テキトー勇者と仲間の怠慢冒険！

ボケありツツコミありメタありバトルあり（？）ラブコメあり（？）

残念系ほのぼの冒険コメディファンタジーストーリー！↑

「旅にでるならお金だね」(前書き)

はじめまして、けちゃといいます。初投稿なので拙い部分もあるかと思いますが、よろしく願います。

「旅にでるならお金だよね」

静かで清々しい昼下がり。

「いやー、堂々と民家漁るのはいいもんだねえ。お、旅人の服発見」

タンスを開きながら俺が言うと、

「勇者さん・・・あんまりそういうこともんじゃないですよ・・・」

と、僧侶ちゃんに怒られた。いやあ、怒ってても可愛いなあ僧侶ちゃん。

「ま、貰えるものは貰っておいたほうがいいんじゃない？貢ぎ物だと思って。」

などと地味に腹黒いことを言うのは賢者。おねーさんキャラだが驚くほどつるぺた「消すわよ?」「ごめんなさい何も言ってません。

「にしてもお前ら面倒なことしてるなー。タンスごと持ってけばいいじゃないか」

・・・このガチムチマッチョは戦士。アホ。キング・オブ・アフオ。A・F・O。

・・・いきなり俺が勇者だと告げられ、王様に100Gと銅の剣を貰って旅立ってはや数ヶ月。
勇者の動き（強奪）も様になってきた。
しかしこれから世界救いに行くってヤツに100G+安物の剣って・
・俺達の国そんなに財政難だったのか・・・。

今は俺達の住んでいた城下町から北東の、小さな村にいる。

「それにしても静かでいい村ですね。自然も綺麗ですし・・・。」

僧侶ちゃんがそんなことを言うと戦士は、

「そうかあ？何もない村だし、早く洞窟の魔物片付けちまおうぜ！」

とか言い出した。この脳筋には自然を楽しむ感性はなかったらしい。

とはいえこの村が魔物に困らされているというのは聞いているので、

「取り敢えず今日はもう日がくれるし、洞窟は明日にしないか？」

とみんなに聞くと、

「いいんじゃない？夜出歩くのは危険だしね。」

と賢者。

「じゃあもう飯が食えるんだな？ヒャッホウ！」

・
・
・
なんで俺コイツ仲間にしたんだっけ
・
・

「旅にでるならお金だね」(後書き)

まだまだ始まったばかりですが、意見要望質問アドバイス等と嬉しいです！

「裏目に出ることってあるよね」

翌日、俺達は村の近くの森の奥にある洞窟に向かった……のだが。

「迷った……」

森は薄暗く、目印もないのですぐに迷ってしまった。

「しかし勇者が道に迷うなんて珍しいなー！リンゴも木から落ちるってやつか？」

……戦士のアホが何か言ってるので、ツッコんだら負けかと思いつつも、

「お前はアレか、万有引力でも発見したのかニュートン戦士」

と、きちんとツッコんでやる。

「それを言うならサルですよ戦士さん……」

俺の態度とは逆に、優しく教えてあげる僧侶ちゃん。マジ天使。

「なにはともあれ、早く進まないとまずいんじゃないかしら？」

賢者が話を進めてくれる。確かに出てくる敵は雑魚とはいえ、このままでは消耗してしまう。

「じゃあ、どっちに進む？僧侶ちゃん。」

まずは進まないと埒があかないので、俺はひとまず僧侶ちゃんに聞いてみる。

「え？じゃあ東に・・・」

「西か」

「西だな！」

「西ね」

「えええええ！ひどいです皆さん！何で聞いたんですか！」

僧侶ちゃんの勘が驚くほど当たらないのはここまでの短い旅で嫌というほど思い知った。

「ぐすん・・・皆さんが私のことイジメます・・・」

「ま、方向は決まったし進みましょうか。」

拗ねてる僧侶ちゃんを華麗にスルーして賢者が歩き出したので、俺と戦士も後に続く。

「ふええ・・・おいてかないで下さいいいいいい！」

僧侶ちゃんの指すほうと真逆に歩き続けると、洞窟の入り口が見えてきた。

「ここまで完璧に当たらないなんて・・・流石の俺も目からゴボウだぜ・・・」

「ずいぶん斬新な目をしてるんだなお前は」

僧侶ちゃんが落ち込んでいるのでそれを言うならウロコだと正してやる人もいない。

「戦士の中ではことわざがマイブームなのかしらね・・・」

賢者はそう言うが、そうだとしたら迷惑この上ない。ツッコむ方の身にもなってくれよ。

まあそれはおいといて、

「さて、気を取り直してダンジョン攻略といきますか！」

「涙目上目遣いは反則だろう」

「暗いな・・・」

洞窟に入ると、日の光はすぐ届かなくなった。最近までは炭鉱だったらしいのでどこどこに松明があつて先には進めるが、かなり薄暗い。

「か、かなり暗いわね・・・」

賢者はそういつて俺の服の裾をキュツとつまんでくる。あれ、こいつもしかして・・・

「暗いトコ怖いのか？」

「ばっ、そ、そんなわけじゃない！はぐれると大変だと思っただけよ！」

そういつので賢者の手を離し、サツと離れてみると、

サツ。

ピタッ。

サツ。

ピタッ。

賢者はしつかりくつついてくる。更にからかおうと思つたが、賢者が涙目で見上げてくるのでやめた。賢者にも苦手な物があつたとはな・・・

「二人とも、何遊んでんだ？」

戦士が聞いてきたのでなんでもないと答えておく。

「それにしても何か出そうですね・・・」

と、僧侶ちゃんが言う。どうやら僧侶ちゃんも多少怖いらしい。

「や、やめてちょうだい僧侶ちゃん・・・」

だが賢者の方が重傷のようだ。このままでは女子勢が使い物にならないので俺は、

「大丈夫大丈夫、最初のダンジョンなんてどのRPGでもお試してみたいなもんだし、何も出ないよ。」

と言ってやる。

「RPG？なんだそりゃ？」

俺のメタ発言に首をかしげる戦士。

「そ、そうよね、最初のダンジョンなんてト。ワの森みたいなもんだよね！」

いや、トキ。の森は最初にしては結構むずかったような・・・

まあ効果はあったようなので敵を蹴散らしつつ進むと、光が漏れ出る部屋のようなものがあつた。

「ここか・・・」

俺は部屋のドアの隙間から中を伺う。するとそこには????!

「賢者さんマジばねえっす」

(な、なんかカン。タミたいのいるーーーー!!)

中を覗いた俺は、中にいたヤツに驚愕する。

なんだあの覆面上半身裸男・・・モロにカンダ。じゃねえか・・・みんな力。ダタわかるかな、ドラ。エ3の。まあわからん人はググってくれ、見た目が一発でわかる。

なにはともあれ、俺は呼吸を整えてみんなのところに戻る。

「ど、どうでした？」

と、僧侶ちゃんが聞いてきたので俺は答える。

「あ、ありのまま見たことを話すぜ・・・扉を開けたと思ったらカンダ。がいた・・・何を言っているのかわからねえt(ry」

かくかくしかじか

「じゃ、そいつをぶっ倒せばいいんだな？単純明快じゃねえか！」

恐らく話を一割程度しか聞いてなかったであろう戦士が言う。

俺は四字熟語が珍しくあつてのに驚きつつも頷く。

「それで、その人(?)はあの部屋にいるんですか？」

僧侶ちゃんが聞いてくる。

「ああ、子分も一緒にいたいだ……ってあれ？賢者は？」

その時、ガラガラガラガラスドーン！と背後でものすごい音がした。俺は嫌な予感に冷や汗を流しつつも、後ろを振り返る。

するとそこには、もうもうと立ちこめる砂煙の中、瓦礫をまたいでこちらに歩いてくる賢者が。

「え、えと……なに、したんだ？」

俺が恐る恐る聞いてみると賢者は、

「倒すのも面倒だし、洞窟にの天井崩して入り口ふさいできたわ。」

な、なんて卑怯な！もしかしたらバトルシーン期待してくれてた人もいるかもしれないのに！

「あーっ！俺が戦いたかったのに！」

張り切っていた戦士が嘆く。

「戦闘なんてバカのことよ。生き物を殺す手段なんていくらでもあるわ」

こ、こえええええええ！やっぱ黒いよこの人！色々と！そして暗いトコから早く出たいだけで絶対！

「さ、みんな行きましよう」

笑顔が怖いです賢者さん。

まあ一応問題は解決したし村に戻る。（帰りは迷わなかった）
すっかりあたりも暗くなっていた。もう今日は休もう・・・

「なんでみんなグー出すかなあ・・・」

翌朝、村長の爺さんのところに報告に行くと、

「ほっほっほ、おぬしらならやってくれると思っとなつたわい」

とか余裕なことがわかった。

なんとなくイラッときたので、俺は爺さんの頭にモンゴリアンチョップを食らわせ、報酬と壺の中身を拝借して家を出る。

今日はこの村で一日休む予定なので、各自思い思いの過ごし方をしている。

ちなみに俺はジャンケンで負けたので村長への報告だ。

俺は特にすることも無いので、みんなの様子でも見に行こう。

道具屋や武具屋が並ぶところに行くと、僧侶ちゃんが薬草を選んでいた。

俺は後ろからそつと声をかけてみる。

「いつもありがとね、僧侶ちゃん」

「ひあぁっ！？え、あ、勇者さん、驚かさないでくださいよ！」

どうやらおどかしてしまつたらしいので、素直に謝る。

「それにしても珍しいですね、勇者さんも面白い物ですか？」

「いや、買い物は僧侶ちゃんに任せてるからね、いつもありがとう。」

基本的に俺たちの財布は僧侶ちゃんが握っている。
というか他の三人は稼ぐことはできても管理ができないのだ。

「あ、い、いえ、どういたしましてっ！」

俺がお礼を言うと、何故か赤くなる僧侶ちゃん。・・・そんな要素あつたか？

「じゃ、これ以上買い物の邪魔してもあれだし、もう行くね」

俺は手を振って立ち去る。

「あ、全然邪魔とかじゃ・・・」

僧侶ちゃんが何かゴニョゴニョ言っているような気がするが、おそろく気のせいだろう。

さて、一旦宿屋に戻るかな・・・。

「筋肉さんがーむらがーえった、ってか」

俺は村をブラブラしながら宿屋に戻る。

すると宿屋の庭に戦士がいた。

「・・・フツ！フツ！おお、勇者じゃねえか！」

・・・半裸で。

俺は無視を決め込むことにする。こんな半裸男知るものか。

「あ、ちょっと待てよ、どこいくんだ、お前も筋トレしていこうぜ
！」

「なんだ、俺はアリの行列を眺めるのに忙しいんだ」

「俺の存在アリ以下！？」

やっぱりほつとくとうるさそうなので相手をしてやろう。

落ち込んで肩を落としながらベンチプレス（110kg）を持ち上げる戦士に俺は尋ねる。

「しかし、こんな量の筋トレグッズ、どうしたんだ？」

戦士の周りにはよくわからない器具が並んでいた。俺にわかるのはダンベルくらいだ。

「ああ、ここの宿屋のご主人が筋トレ好きで意気投合してな、貸してもらったんだ。」

「昨日お前と宿主さんが夜遅くまで二人で飲んだのはそのせいか・
・・」

昨日の夜は二人の太い声が宿屋中に響き渡っていた。

「おう、というわけで勇者、お前も筋トレ」「断る!」「」

こいつの筋トレなんか付き合ったら3日は筋肉痛で動けなくなる。

なんせこいつが片手で何度も持ち上げるダンベルですら、俺は両手と全身を使ってもかすかに浮くだけなのだ。

決して俺が弱いわけではない。むしろ平均よりは上くらいだと思っている。

こいつの筋肉が異常なのだ。

「なんで断るんだよー。筋肉あれば嬉しいなっていうだろ?」

「俺は別に必要以上の筋肉は要らないしお前と違って勇者だから魔法使えるしそもそもそれは備えあれば憂いなしって言うてもはや憂いなしの部分すら変わってるぞかつっこんだりしてる間に俺はさっさと逃げさせてもらう、じゃあな」

「お、おう、じゃあなー」

大変な目に遭うところだったぜ。

賢者は宿屋の中かな、なんとなく。行ってみよう

「べったん♪べったん♪つるべったん？」

二つ部屋をとっているうち、女子部屋の方をノックして入ると、賢者はベッドに寝転んで本を読んでいた。

「あら、勇者じゃない。どうしたの？」

賢者は普段着ている装備ではなく、緩めのＴシャツとホットパンツのような短いズボンを身につけていた。

なんというか、その・・・かなりセクシーだ。

首もとから覗く白い肌や、スラリと伸びた長い足に、目を奪われてしまう。

「ああ、いや、みんなは何してるのかと思ってさ」

まあつるぺただけだね！うつ伏せで本を読むのに適したつるぺただけd熱い熱いなんだこの焼けるような感覚は・・・

「勇者、あなた今失礼なこと考えてなかったかしら？」

賢者の手には火の玉が浮いていた。なるほど、それを俺に押し付けていたからこんなに・・・

「って熱いわあああああ！ごめんなさいごめんなさいすいませんもうほんとマジで！」

ああ、全力で謝ったとも。

ていつか人の心読めるのかこいつ・・・

「全く……。結構人が気にしているのに失礼ね」

むう、機嫌を損ねてしまったようだ。ここはフォローしておかないとな。

「まあ、世の中には小さい方が魅力を感じる人もいるらしいしさ、気にすることないんじゃないか？」

よし、ナイスフォローだ俺！

「そ、そうかしら？あの、べ、別に興味は無いけど、勇者はその・・・どっちが・・・」

俺が自分のフォローを自画自賛していると、賢者が何かゴニョゴニョ言っていた。

「ん？悪い、もう一回言ってくれるか？」

「な、なんでもないわよ！勇者の馬鹿！」

ボタン！・・・と、追い出されてしまった。

賢者が声を荒げるなんて珍しいし、話を聞いてなかったのは失礼だったなと思う。何を言ってたのかはわからないが、後で謝っておこう。

「さて、皆が集まる時間まで経験値集めでもしますかね、っと。」

「スライムって冷んやりしてて気持ち良いよね」

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

髪から汗が滴り落ちる。

もうかなりの数を倒したはずだ。

「しかしいくら序盤の雑魚モンスターとはいえ、一人で倒し続けるのは無理があつたな・・・」

皆のところを回ってから、ずっとモンスターを狩り続けていた。今は村の近くの岩にもたれて休憩中だ。

時々、暇な時間には俺はこうして経験値稼ぎに出るようにしている。

他の三人よりレベルが低いと示しがつかないし、

俺みたいな中でも勇者は勇者。パーティーの仲間も守れないで勇者なんてやっていけないのだ。

俺だけレベルが高いのを皆は、

「勇者だけずりぞ」とか「主人公補正ね」とか言ってくるけど、実はこうしてコツコツ稼いでいる。

いくら生き返るとはいえ、僧侶ちゃんや賢者を酷い目にあわせるわけにはいかないしな。

・・・戦士？あいつは筋トレで能力値上がるからいいの。

そうして休んでいると、またプルプルしたモンスターが襲いかかってきた。

俺は鈍く輝く銅の剣を腰から抜きつつ立ち上がる。

「さて、と。もう一踏ん張りしますかね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7715y/>

「なんか知らんが勇者に選ばれた」

2011年12月3日18時56分発行